

社会的に共有された母性観と家族内で交渉される母性観

— 家族成員による自由記述から見た母親イメージとその実像 —

佐々木 美 恵

I. 問題と目的

私達は、日常の中で、とくに疑問に思うことなくさまざまなことに会い、処理し、そしてときには見過ごしていくことができる。たとえば、育児雑誌の表紙を飾る母親はなぜいつも幸せそうに笑っているものばかりなのか、また、なぜ私達は子供と接するときに過剰ともいえるほどに受容的に微笑んでしまうのか。そういったことに疑問を感じて立ち止まることはほとんどないと言ってよいだろう。しかしそこにはどのようなことが起こっているのか、ふと疑問をもつ試みをしてみたくなった。私達が微笑まざるを得ない、または自然にそうしてしまうような、より大きな力が働いているように感じられたのである。

発達早期の母子関係に焦点を当てる理論では、抱える環境としての母親の機能が、子の問題の鍵を握るとされることが多い。つまり、子を囲む環境としての母親のあり方によっては、ときに子は重篤な障害をもちうる、という視点に立つものである。ウィニコットの「ほどよい母親」(good enough mother)、ボウルビィの母性剥奪(maternal deprivation)などの概念がそれに該当しよう。そういった理論から、子育てを失敗しないために、「よりよい子育てのあり方」や「よりよい母親モデル」が提供されることはやむをえないだろう。実際に、母子に関わる心理臨床において有用な視点を提供してくれるものであり、私達も大いに活用するだけの説得力があるからである。しかし現実には母親も一人の人間であり、失敗することも当然あるのである。子どもが何を求めて泣いているのか全く分からずに泣きたくなることもあろうし、子どもとの関係でイライラ・怒りに圧倒されることもあろう。「よい母親」を求めることは、そこから「悪い母親」を切りはなすことになり、両面があつての母親体験なのだ、という理解を脅かす危険性がある。スウィガートは、母親を理解するとき、「誰もが一定の距離を保つために理想化するか非難するか」(斎藤, 1995)のどちらかになると述べている。これは、母親理解においていかに「よい母親」「悪い母親」との分裂が起こりやすいか示唆していると言えよう。

パーカー(1995)は、「子どもへの愛と憎しみが同居するという母性のアンビバレンスは、あらゆる母親の共通の体験である」と述べている。ユングも、無意識的水

準において「よい母親」「悪い母親」という母親のアンビバレンスの存在を唱えている。つまり、母親の真実として、または深層世界として、愛と憎しみという母性のアンビバレンスは存在していることが考えられるのである。しかし、現実においては、子を愛し献身的に尽くす「よい母親」だけが受け入れられ、子への憎しみを抱く「悪い母親」はあってはならないものとタブー視されているように思われる。「母性」という言葉がポジティブな性質を担うことから感じられるように、私達の社会が期待する母親像は「よい母親」なのであり、「悪い母親」は社会的に隠蔽されている、と考えることができそうである。つまり、私達がある社会・文化の中で生活している以上、その社会・文化がもたらす影響を軽視することはできず、「母親」にまつわる価値体系も社会的構成概念としてとらえる必要があるものと思われる。さらに、内在化された価値体系に対し、個人がそれとどのような関係性をもちうるか、という視点も重要であろう。そこで本研究では、「社会的構成概念として共有されたよい母親像」を「社会的に共有された母性観」とし、1)「社会的に共有された母性観」の抽出・検討、2)個人と「社会的に共有された母性観」との関係性を描き出し検討することを目的とした。

II. 研究 I

1. 目的

社会的に共有された母性観を抽出・検討すること。

2. 方法

対象：高校生とその両親を一家族とし、回答の得られた115家族(父親67名、母親96名、高校生94名；男子26名、女子66名)を分析の対象とした。必ずしも父親・母親・子の三者の回答がそろわなくても有効とした。

調査時期：2000年10月上旬。

調査方法：質問紙法による。[母親とは_____。]という刺激文を提示し、_____部に当てはまるものとして、思い浮かぶ言葉を簡潔に三つ回答してもらった。さらにそれぞれの言葉に対して具体的にイメージされる態度・行動についても記述を求めた。実際には現実の母親など具体的イメージから言葉が引き出されうことは容認した上で、あくまでも「一般的イメージとして」という注釈を添えた。

3. 結果と考察

得られたイメージ群を、父親・母親・息子・娘の四者ごとにKJ法を用いて整理し、母親イメージ布置図を作成した。その結果、父親・母親・息子・娘といった立場・役割の差異によって、各々特徴ある母親イメージ布置図が描き出された。しかし、四者間である程度の共通項として抽出された母親イメージがあり、それらを「社会的に共有された母性観」として理解できるものと考えた。それは、『授け手としての母』イメージ、『支え守ってくれる人としての母』イメージ、『受け入れてくれる人としての母』イメージ、『敬う対象としての母』イメージ、『子や家族に尽くす人としての母』イメージといった集会的母親イメージ群として描き出されたものであった。自由記述によって多様なイメージが収集されたことにより、非常に具体的に連想のわきやすい水準で「社会的に共有された母性観」が抽出されたものと思われる。これらが「社会的に共有された母性観」であると短絡的に論じることはもちろんできないが、世代、性別を越えて共有されたものとして、「社会的に共有された母性観」に接近できたものと考えられた。

III. 研究Ⅱ

1. 目的

家族単位で注目し、個人と「社会的に共有された母性観」との関係性を描き出し検討すること。

2. 方法

対象者：研究Ⅰで分析の対象とした115家族のうち、6家族を選択的に対象とした。

調査時期：研究Ⅰと同様。

調査方法：質問紙法による。基本的には研究Ⅰと同様。提出された母親イメージ（研究Ⅰで分析の対象としたもの）について、実際の母親を想起した場合にどうであるのか自由記述を求めた。ただし、父親はパートナーを、母親は自分自身を、子は母親を想起するよう教示した。つまり、一家族内においてその家族の母親という同一人物を想起するよう求めた。これによって、個人における母親イメージと実際の母親との相違、さらに母親をとりまく家族内力動を浮かび上がらせることをねらった。

3. 結果と考察

1) 個人と社会的に共有された母性観との関係性について

分析対象とした6家族の記述から、いくつかの型が描き出された。「何も押し付けない。何も期待しない」と無力感を伴う「切り離し・あきらめ型」。「私の求めているもの」として抱かれる「理想像型」。「一般的な母」として考える「標準一般としての内在型」。実際には「ありのまま」であることをよしとする「割り切り型」。一つの目標として機能する「達成目標型」。男性において

女性・母親へと向けられる「理想」「期待」として抱かれる「期待型」であった。つまり、母性観というものが、実際の母親存在とは異なる次元で確かに存在していることがとらえられたものと思われる。社会的に共有された母性観があるからこそ、母親は「よい母親」になろうと駆り立てられることになり、現実の母親を前にして期待とは異なると幻滅を覚えることにもなる。社会が母親を見つめるまなざし、社会的に共有された母性観というものがいかに個人をとらえ、規定しうるものであるか、それに真に気付くことが自由な関係性への糸口となるのではなかろうか。

2) 社会的に共有された母性観と家族内で交渉される母性観

本研究においては、社会的に共有された母性観だけではなく、個人の体験に密接に基づいて形成される母親イメージのありようもとらえられた。つまり、提出された母親イメージと、実際の母親に対する記述の同一性が見て取れたのである。とくに、まだ社会経験も人間関係の広がりも十分ではない高校生男女においては、ほぼすべてといってよいほどに、提出された母親イメージと現実の母親の姿が重なるものであった。つまり、母親イメージ・母性観というものは、養育体験といった家族内での交渉の結果得られる個人的生成部分と、個人とは別の次元で社会的に構成され共有された部分が確かに存在するという、二重構造を呈するものであるとの視点が本研究において例証され、論じられたものと思われる。

IV. 総合的考察

本研究では、家族内の役割、性別、ライフサイクル上の位置付けを越えて、共通項として抽出された母親イメージを「社会的に共有された母性観」として理解した。橋本(2000)は、「母親は、社会に規定された集会的母親像と自分自身の内的体験とのずれを感じ取り、集会的母親像から自分自身を解放しなければならない」と論じている。つまり、無意識にとらわれているものを現実的言語的水準に引き上げ、それがいかに自分を規定し、つき動かしているものであるのか、理解する仕事が必要と思われるのである。この仕事は母親だけではなく、母親を見つめる側の個人においても重要なものであろう。そういった意味で、本研究においてとらえられた「社会的に共有された母性観」は、具体的日常的イメージであり、私達の理解に貢献するものと思われた。しかしながら、本研究で得られた知見はまだ仮説生成段階にとどまっているものであり、今後の研究においてより実証的に論証していくことが必要であろう。また、社会的に共有された母性観の形成プロセスの検討、社会的に共有された母性観と家族内で交渉される母性観の関係性の検討なども今後の課題として残された。